

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 郷土の美術工芸作家・作品鑑賞

講師 妹尾共子

(高松市歴史民俗協会会員)

平成20年12月21日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 明治三十一年創立

創立当事全国的に工業学校設置の動きが活発化する中で本県においてもその氣運が一段と高まり、納富介次郎先生を初代校長に迎え香川県工芸学校として設立されたのが始まりであります。納富介次郎先生は近代日本の揺籃期にあつて日本の歩むべき道として「日本は貿易立国にならねばならず、そのため産業工芸の振興が焦眉の急である」と喝破された偉大な人物でした。

(校長 石井功夫)

2 初代校長納富介次郎



納富介次郎は一八四四年四月肥前佐賀藩の支藩の小城藩の皇学家の柴田花守の次男として生れた。十三歳ころより勤王の志を持ち長州、萩の志士と交わつたとされ、その頃より画才に優れていたという。一八五九年、十六歳の時本藩の佐賀藩の納富六郎左右衛門の養子となり納富姓となった。一八六二年、十九歳の時、外国事情探索の幕艦「千歳丸」に長州の高杉晋作等五十一人の中の一人として乗船している。高杉の手記に佐賀藩は少年の画工(納富)を入れ、はや外国貿易を考えているという内容の記事が残されている。納富介

次郎はこの旅行で「日本は貿易立国、そのための日本の独創的工芸品の輸出」という信念を得たといわれる。

明治六年（一八七三）日本が国家として初めて参加した万博がウィーン万国博覧会であり、この時の総裁が大隈重信、副総裁が佐野常民である。また現地の案内役がワグネルであった。納富介次郎は陶磁器部門の技術官として参加し、博覧会終了後、佐野の指示、ワグネルの斡旋でドイツやフランスの製陶所で研鑽を積んだ。ここで美術陶磁の製法や彩画法、陶器生産の機械化を学び、日本に石膏鑄込み型による陶器大量生産方式を導入した。

明治九年（一八七六）三十三歳の時アメリカ・フィラデルフィアでの万博に参加した際、アメリカ各地の製陶地から現地にとどまっつての指導を依頼されたが断り帰国した。

明治十年（一八七七）帰国後官職を辞し、東京に江戸川製陶所を設け輸出品の生産を目標むが経営の実があがらず明治十五年に閉鎖する。

明治十五年（一八八二）地場産業の品質向上を目指す石川県に巡回教師として招かれ日本初の同業組合を作った。彼の目的は中国への工芸品輸出であった。

明治二十年（一八八七）当地にあった画学校設立の動きと彼の望みが融合し現在の石川県工の前身である金沢区立工業学校を設立することになる。同校には画学部と工芸部を置き、工芸部には陶芸、金工、漆工、色染の他、機織、紙製品、海産製造まで置いていた。

明治二十三年（一八九〇）政争の渦に巻き込まれ迫害を受ける。

明治二十七年（一八九四）五十一歳の時富山県知事に就任した同郷の徳久恒徳から工芸学校創設を依頼され、同年富山県工芸学校の校長として赴任する。

ここでは木材彫刻、金属彫刻、鋳銅、漆の四科を置き、日本固有で独創的な工芸美術品を海外に出せる人材を養成することを狙いとしたり。

明治三十一年（一八九八）香川県知事となった徳久恒徳の招きで本校初代校長に就任した。本校では在任わずか三年間だがその後百年に影響するものを残した。

明治三十四年（一九〇一）佐賀県、有田町の強い要請で佐賀県工業学校の第二代校長として赴任し、実科に重きを置き、直ちに社会に役立つ人間を養成することを目標にした。

明治三十七年有田分校を独立させ、有田工業学校を作り、以後陶芸有田の人材を多数育てた。しかしまた政争に巻き込まれ東京に帰り、七十五歳で天寿を全うした。

現在彼の像が前庭にあるのは本校以外、石川県立工業高校、富山県立高岡工芸高校、佐賀県立有田工業高校の三校である。本校の像は本校第一回の卒業生で戦前帝展の審査委員長等を歴任したのち、終戦直後に戦争で被災した本校の校長を引き受けた小倉右一郎の制作したものである。納富介次郎が他の三県でも秀れた芸術家を育て、彼等の敬愛を一身に受けたことを証明している（井手誠二郎編「納富介次郎略伝」西日本新聞社刊による）

3 香川の伝統工芸

江戸時代御三家水戸藩の兄弟藩である高松藩には日用漆器生産者の他に武士や町人の高級装身具を作る職人が存在していた。東京美術学校の初期に蒔絵を教えた橋本市蔵が鞘塗師であったように高松でも藤川一族という鞘塗師がいた。このうちの1人、象谷（一八〇六〜一八六九）が讃岐漆芸の基を築いたといわれる。彼は第九代高松藩主松平頼恕（よりひろ）に認められ、京都東本願寺等で四年間の修行をし、特に中国宋代の漆器を研究し讃岐独特の技術とされた蒟醬、存清、彫漆の技法を後の世に伝えることになり、現在もって讃岐の漆聖といわれている。象谷は藩主より帯刀を許されると共に玉楮姓を賜り玉楮象谷と称するようになり、十代藩主、十一代藩主にも仕え三百余点の漆作品を上納している。

明治になると象谷の弟の系統の藤川家が文綺堂を作り、実用漆器の製造販売に力を入れ県外にも多く売り出すことに成功する。その一方で高級作品の研究もして明治十年の第一回内国勸業博覧会に出品して商工大臣賞を受賞している。また明治二十年にはパリ万国博で銀杯を得て讃岐漆器は海外にも広く輸出されるようになる。

4 二代校長 黒木安雄



と書道を講じる。

明治三十五年（一九〇二）に高松工芸学校（現高松工芸高等学校）第二代校長に就任。新たに鍍金科を開設し工芸学校の組織を作り上げる。明治三十九年（一九〇六）に柴野栗山没後百年祭を中心になって盛大に挙行。その後東京に居を移し東京帝国大学、東京美術学校等で漢文や東洋史を教える。上京後は香川県育英会が県人の子弟の寄宿のため東京本郷の地に設けた寄宿舎「讃陽学舎」の代表に就任、地元に残る岡内清太、山川波次等と中央教育界とのパイプ役も務めた。

明治四十四年（一九一一）より書道界を統括し古筆や金石、碑文学の学術研究及び啓蒙のための雑誌『書苑』を発刊。同時に書写書道教育の重要性を文部省や学校、教育機関等

号欽堂、字は飛卿。書家であり漢学者であり教育者でもあった。琴平の神官で樛舎塾塾長であった黒木茂矩の長男として生まれる。当時樛舎塾は国漢の塾生千名を超え、安雄は幼少時より大勢の塾生を導く父の姿勢を身近に見聞していた。東京帝国大学古典講習科を卒業後香川県尋常師範学校に勤め、漢文

に説いて回り芸術科書道科目の大綱をまとめる。能筆の彼が揮毫した作品が今も香川県内の博物館・美術館等に残る。

参考文献

「高松工芸百年史 礎」 平成一〇年一月一日発行

香川県立高松工芸高等学校

創立百周年記念委員会

2008年11月8日 四国新聞記事



川島 猛
創立 100 周年記念モニュメント